

# アダム・スミスの「外部感覚論」について

篠原久

## 序

スミスの遺稿集『哲学論文集』の冒頭の論文「哲学的研究を指導し指揮する諸原理」は、「天文学史」、「古代物理学史」、および「古代論理学および形而上学史」による例証という構成をとっている。これらは、人間の好奇心が向けられる諸対象の順序を反映したものであり、したがって学問の発生のを示したものである。またスミスの見解によれば、「論理学および形而上学」はほんらい自然哲学＝物理学から発生したものである<sup>1)</sup>ので、この冒頭の論文は「自然哲学史によって例証された哲学研究指導原理」ともいうべきものである。

ところでスミスは、『道徳感情論』の第7部「道徳哲学の諸体系について」において、マンデヴィル体系を批判したあと、次のようなコメントを加えている。「自然哲学の体系というものは、ひじょうにもっともらしくみえるかもしれないし、ながいあいだ世間でひじょうに一般的にうけいれられるかもしれないのに、しかも、自然のなかになんの基礎ももたないかもしれず、真理に対して、どんな種類の類似性ももたないかもしれない。……しかし、道徳哲学の諸体系については、事情がちがうのであって、われわれの諸道徳感情の起源を説明す

1) Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*, 1795, Kelley's reprint, *The Early Writings of Adam Smith*, ed. by J. R. Lindgren (以下 *E. W.* と略す), p. 124. この点をとくに強調したものとして、V. Foley, *The Social Physics of Adam Smith*, 1976 がある。スミスの根本思想を古代ギリシヤの唯物論的諸学説と結びつけようとする試み（これがフォーリーの書物の主題である）に対しては、リンドグレンの批判 (Book Review) を参照。 *History of Political Economy*, vol. 10, no. 4, 1978, pp. 683—85.

アダム・スミスの「外部感覚論」について

ると称する著者が、われわれをそれほどそっくり欺くことも、真理へのあらゆる類似からそれほどひじょうに逸脱することも、ありえないのである。……自然哲学をとりあつかい、宇宙の偉大な現象の諸原因を示すと称する著者は、ひじょうに遠い国のできごとを説明すると称するのであって、かれはそれについて自分が好むとおりのことをわれわれに語っていいし、かれの物語が、可能らしい外見の枠内にとどまるかぎり、かれはわれわれに信じさせることに絶望する必要はない。しかし、かれがわれわれの諸欲求と諸感受作用 **our desires and affections** の、われわれの明確な是認と明確な否認の感情の起源を説明しようとして提案するばあいは、かれは、……われわれ自身の家庭内の事柄について、説明すると称しているのである。ここでもまた、自分たちをだます執事を信用する、怠惰な主人たちのように、われわれはひじょうにだまされやすいけれども、それでもわれわれは、真理に対してなにかすこしでも顧慮を保持していない、どんな説明〔勘定〕も、承認することができない。すくなくとも、諸項目のうちいくつかは、正当でなければならぬし、そしてひじょうに水増しされている項目でさえも、ある根拠をもったものでなければならぬ。そうでなければ、その詐欺は、われわれがしようと思っている不注意な検査によってさえ、みつけれらるであろう。」<sup>1)</sup> ここにおいて性格づけられている自然哲学の諸体系が、いかにして世間で一般的にうけいれられてゆくようになるのかを示したものが「哲学研究指導原理」であり、そのもっともすばらしい例証が「天文学史」であった。スミスによれば、あらゆる自然哲学体系は、自然の連結原理である「見えない鎖」を提示することによって、不調和な様相を呈している自然現象のなかに秩序を導入し、想像力の動揺を静め、それをほんらいの平静な状態にまで回復させることを目的とする、いわば「想像力にうったえる技術

- 1) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Glasgow edition, 1976 (以下 *T. M. S.* と略す), pp. 313—14, 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房 1973年, 393—95 ページ。この文脈の主旨が、マンデヴィル体系が一見どんなに破壊的なものであるにしても「若干の点で真理に境を接している」(*Ibid.*) ことの指摘にあったことはいうまでもない。

## アダム・スミスの「外部感覚論」について

のひとつ」なのである (E. W., p. 45). これに対して、道徳哲学体系は、「少数の一般原理によって結合されたさまざまな観察の、体系的配列のうつくしさ」を目ざす点においては、自然哲学体系と共通性をもつものではあるけれども、<sup>1)</sup> それらの一般原理は、自然哲学体系のばあいと異なって、自然のなかになんらかの基礎をもっていなければ「もっとも思慮がなく経験がない読者にとっても、背理的で滑稽にみえる」とされているのである。<sup>2)</sup> つまり、自然哲学体系の構築にあたっては、想像力は比較的自由に飛翔することができるが、道徳学的体系においては、その跳躍台は、自然 Nature の構造のなかに深く根をおろしているのである。

本稿でとりあげようとする『哲学論文集』末尾の「外部感覚論」は、外的世界をいかにしてわれわれの外部諸感覚 External Senses によって認識するかという問題を取扱ったものであり、いわば、自然哲学と道徳哲学の中間的位置を占めているものである。したがって「外部感覚論」には、以上の二つの学問体系にかかわる問題点が含まれていると考えられるが、本稿はこの点を念頭におきつつ、スミスの所論を追いながら、とくに『道徳感情論』の基調となっている自然のエコノミー（経済性、秩序、摂理）との関連において、かれの認識論の一側面について考察しようとするものである。<sup>4)</sup>

## I 固性 Solidity と内的感受作用 Internal Sensations との峻別

スミスによれば、「われわれが外的諸対象を知覚する諸感覚 Senses は、通常

- 
- 1) Adam Smith, *Wealth of Nations*, Glasgow edition, 1976, pp. 768—769, 水田洋訳『国富論』下巻, 河出書房新社, 1965年, 191ページ.
  - 2) 自然哲学をとりあつかう著者は、どこか遠い国の説明をするばあいのように、「われわれの信じやすさに乗じて、もっとも根拠がなく背理的な虚構 fictions を、もっとも確実な事実として、おしつけるかもしれない」T. M. S., p. 314, 邦訳 394 ページ.
  - 3) T. M. S., p. 314, 邦訳 395 ページ.
  - 4) スミスと（ロック、パークリー、ヒュームなどの）イギリス経験論との関係を明らかにしようとする論文としては、生越利昭「アダム・スミスの認識論とイギリス経験論」『商大論集』（神戸商大）第30巻, 3・4号, 1979がある。スミス「外部感覚論」における「本能」の取扱いについては、しかしながら、われわれの見解とは異なる。

アダム・スミスの「外部感覚論」について

五つ数えられ、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の順に列挙されるが、かれはこの順序を逆にして、触覚から考察しようと述べる (*E. W.*, p. 185). このことによって、かれはまず、触覚の独自性を強調するのである。というのは、この感覚は「動物の生命と生存の本性にとって不可欠であり、それから分離しえない」 (*E. W.*, p. 202) ものであるばかりでなく、この感覚によってのみ、事物の外在性 *externality* を認識しうるからである。触覚の諸対象は、つねに、それらに触れる身体の特定期間を圧迫し、抵抗するものとしてあらわれるが、この圧迫や抵抗 *pressure or resistance* という性質によって、われわれは、それらの対象がわれわれの身体から独立したものとして、つまりわれわれの外部にあるものとして感じるのである。「私が自分の手をテーブルにおくとき、私の手がテーブルを圧迫するのと同様に、テーブルは私の手を圧迫する、つまり私の手のさらにいっそうの運動に抵抗する。しかし圧迫や抵抗は、必然的に、圧迫し抵抗する事物のなかに外在性を想定している。テーブルは、もしそれが私の手に対して外部的なものでなければ、私の手を圧迫しえない、つまり、私の手のさらにいっそうの運動に抵抗しえないであろう。したがって、私はそれ〔テーブル〕を、私の手の感受作用 *affection* であるのみならず、私の手に対してまったく外部的で独立した、なにものかとして感じるのである」 (*E. W.*, p. 185). たまたまテーブルを強く押ししたり弱く押すことによって生じるさまざまな圧迫感 *agreeable, indifferent, or painful sensation of pressure* は、なるほど手の感受作用として感じられるけれども、手の圧迫に抵抗するテーブルは、これらの感受作用とはまったく異なったものとして、つまりそれに触れる手の外部にあってそれから独立したものとして感じられる (*E. W.*, pp. 185—86). この「抵抗する力もしくは性質」 *power or quality of resistance* をスミスは固性 *Solidity* と呼び、これが触覚の対象であると考えてるのである。固性をもつ「固性的物体もしくは事物」 *Solid Body or Thing* は、われわれから独立して外部にあるものとして感じられるので、「われわれは、それをいわゆる実体 *Substance*, すなわちそれ自体で実在し *subsists by itself*, 他のどの

アダム・スミスの「外部感覚論」について

事物からも独立したものとみなすのである」(E. W., p. 187)<sup>1)</sup>。そしてこの固性的実体 **solid substance** の観念や概念に必然的に含まれる性質もしくは属性として、スミスは、延長 **extension**, 分割性 **divisibility**, 形状 **figure**, および可動性 **mobility** をあげる<sup>2)</sup>。しかしながらスミスは、このことからただちに、「固性的実体がそれ自体として」**solid substance...as such**, 他のどのような性質や属性ももちえないなどと結論するのは軽率というものであろうと、戒めている<sup>3)</sup>。つまりスミスは、哲学者たちが、物体の固性についての観念の研究に没頭するあまり、物体についての観念と物体そのものを混同し、具体的な物体に、その観念に含まれている諸属性いがいのものがありえないと思いこんでしまう傾向に警鐘を発しているのである。

ところで、すべての固性的実体は、まず抵抗するものとしてとらえられるが、それらには、容易に変形し、圧縮しうるものと、そうしえないものがある。このような現象から、諸物体について、軟らかさ・硬さ、流体・固体の区別がなされている。しかしながら、物体が圧縮 **compression** に抵抗する力の大小は、物体の容積に含まれている空間 **empty space** の割合の大小によるものであるから、もし物体がその容積のなかに空間を含まず、そのすべての部分にわたって抵抗的実体で満たされていると想定すれば、その物体は「絶対に圧縮不

- 
- 1) 「したがって、[圧迫感, 抵抗感と直結する] **Solid** と [外在性, 独立性と直結する] **Substantial** の二つのことばは、通常の言語においては、まったく同義であるか、もしくはほとんど同義であるとみなされている。」(*Ibid.*)
  - 2) 「固性は必然的に、ある程度の延長[つまり、かさや大きさ **bulk or magnitude**]を想定する。それがなければ、われわれは、いかにして固性的諸物体が圧迫もしくは抵抗しうるのかさえ理解しえない。……延長, 少なくとも可感的な延長は、分割性を想定する。……固性をもち延長をもった物体はどれも、……無限でないかぎり、なんらかの形と形状をもつ、つまり一定の線と面によって囲まれているにちがいない。そのような物体はどれも、また、運動と静止の双方が可能であると考えられるにちがいない。」(*Ibid.*)
  - 3) 「このひじょうに軽率な結論が、ひじょうに博名な哲学者たちによって、疑う余地のないもっとも確実な公理として引き出されたのみならず、主張されたのであった。」(E. W., p. 188)

アダム・スミスの「外部感覚論」について

可能」なものとして、また「それをより小さな容積に減少させようとするあらゆる試みに、克服しがたい力で抵抗する」ものとして考えられるであろう (*E. W.*, p. 190). したがってスミスによれば、固性そのものの性質についての説明のなかでは、いわゆる「物質の不可入性」**impenetrability of matter**, すなわち「二つの抵抗する固性的実体は、同時に同一場所を占めることは絶対に不可能である」という概念が、もっとも説得的なものであった。この学説は、かれによれば、古代のレウキッポス、デモクリトス、およびエピクロスとともに古く、17世紀にガッサンディによって復活させられ、それ以来、ニュートンとその後継者たちによって採用されてきたものであり、「現在では、もっとも確立した体系、つまりもっとも流行し、ヨーロッパの大部分の哲学者によってもっとも是認されている体系とみなされうる」ものなのである (*Ibid.*). スミス自身も、この学説は、「あらゆるものを混同し、なにものも説明しないたぐいの形而上学から引き出された若干の当惑させるような議論によって反対されてきたけれども」 「全体としては、その解明しようとする現象にかんして、これまでに与えられたもっとも単純で、もっとも明確で、かつもっとも包括的な説明であるように思われる」 (*Ibid.*) と述べることによって、暗にこれをうけいれざるをえないことを認めている。しかしながらスミスは、ここにおいても、次のように付言することを忘れていない。「抵抗的実体の硬さ・軟かさ、流動性・固性 **fluidity or solidity** [つまり通常の流体と固体との区別]、圧縮可能性・圧縮不可能性にかんして、どのような体系が採用されうるにせよ、その実体の外在性、つまりそれを知覚する器官からそれが完全に独立していること、についてのわれわれの明確な感覚と感じの確実性 **the certainty of our distinct sense and feeling of its Externality** は、そのようななどの体系によっても少しも影響を受けえない。したがって私は、そのような諸体系について、これ以上の詳しい説明を企てないであろう」 (*E. W.*, p. 191). このようなスミスの言明の背後には、触覚によるこの「外在性についての明確な感覚と感じ」によって、われわれは、もっとも根本的な区別、つまり自己と外部の物体(動物、

## アダム・スミスの「外部感覚論」について

人間を含めた)との区別をするのだという(「外部感覚論」冒頭の)主張が横たわっていた。盲人が自分の足に手を触れるばあい、かれの手足はそれぞれ抵抗する物体の圧迫感を感じるのところから、それらは互いに外部的だといえるであろうが、かれ自身に対してはそうではない。というのは、かれは手足双方において圧迫感を感じるので、「かれは当然に、それらをかれの一部として、つまり自分に所属し、自己の幸福と安楽のためになんらかの配慮をすることが必要なものとみなす」からである。これに対して、かれがテーブルに触れるときには、圧迫感のかれだけに生じるものであるから、かれはその事物をかれに所属するものとは考えず、またその状態にはなんらの関心も払わないのである(*E. W.*, p. 186)。動物や他の人間にかんしても、基本的には同じことがいえるのであるが、このばあいにはかれは次のような興味深い表現をとっている。「かれが、他の人間かどれか他の動物のいずれかの身体に手をおくとき、かれがかれらの身体の圧迫を感じるのと同様に、かれらがかれの手の圧迫を感じることをかれは知っているけれども、もしくは少なくとも知っているかもしれないけれども、この感じは、かれにとってはまったく外的なものであるもので、かれはそれに注意しないことが多いのであり、また自然がもっとも賢明な諸目的のために、すべての他の人間に対してばかりでなく、(ずっと弱い程度においてではあるけれども)すべての他の動物に対して、人間のなかに植えつけておいたあの同類感情 *fellow-feeling* によって義務づけられている以上の関心をそれに払うことはめったにないのである」(*E. W.*, pp. 186—187)。

触覚の固有の対象についての考察を以上で終えたあと、スミスは次に、熱さ

- 
- 1) *fellow-feeling* の範囲を動物にまで及ぼしている「外部感覚論」の叙述では、次のような文章がつづいている。「人間をこの小さな世界における支配的な動物になるように運命づけたのであるから、かれに、その臣下のもっともみすばらしく、もっとも弱いものに対してさえも、ある程度の敬意をいだかせることが、自然の慈悲深い意図であったように思われる」(*E. W.*, p. 187)。なお、個人の感受作用 *affection, sensation* の自己本位性 [*selfishness*] と、想像力にもとづいた *fellow-feeling* による他人の感受作用への同感については、『道徳感情論』冒頭の二つのパラグラフを参照せよ。

アダム・スミスの「外部感覚論」について

と冷たさ **Heat and Cold** の感覚をとりあげる。かれによれば、これらは、触覚のばあいと同様に、身体のほとんどあらゆる部分によって知覚されるところから、一般に、固性や抵抗とならんで、触覚の対象である諸性質に所属させられてきたけれども、スミスは熱さと冷たさは、実際には、触覚の固有の対象となる諸性質とはまったく異なる種類の感受作用 **sensations** であることを強調する。それらは「器官を圧迫するものとしてではなく、器官のなかにあるものとして感じられる」のであって、それ自体としては、必ずしも、外的諸対象の存在を暗示する **suggest** ものではないのである (*E. W.*, p. 191)。ただ、われわれはまもなく経験から、通常それらの感受作用がつねに外部の物体によってひきおこされることを知るようになるので、両者が慣習的に結びつけられるにすぎないのである。スミスはむしろ、このことに由来する、**Sensations** に与えられる名称のあいまいさという問題に注目する。「このような経験の頻度と斉一性 **frequency and uniformity** によって、またこの頻度と斉一性が必然的にひきおこす思考の慣習と習慣によって、内的感受作用 **Internal Sensation** と、その感受作用の外部的原因 **External Cause of that Sensation** とが、われわれの想念 **conception** [つまり **imagination**] のなかでひじょうに密接に結びつけられるようになるので、われわれの通常の不注意な思考方法においては、われわれはそれらをほとんど同一のものとみなし、したがってそれらを同一のことばで表示する傾向がある」(*E. W.*, p. 192)。たとえば「テーブルが熱い」**the table is hot** というばあい、われわれは、身体内に感じられる感受作用と、物体(テーブル)のなかであってこの感受作用をひきおこす力とを、ともに同一のことば (**hot, heat**) で表現するのである。しかし、このばあいの混同は、ことばのなかであって、思考のなかにあるのではないとスミスはいう。なぜなら、「テーブルが熱い」という表現において、われわれは、熱いという感受作用をテーブル自体が感じるとはけっして考えないで、この感受作用をひきおこす力をテーブルが持っているということを意味しているからである。それゆえスミスによれば、「熱さという感受作用や感じが火のなかにはないという意味で、



## アダム・スミスの「外部感覚論」について

火は熱くない **there is no heat in the fire** ということを証明しようと骨を折った哲学者たちは、人類のなかでもっとも無学な人でさえけっしていただいたことのない意見に反駁しようと努力した」ことになるのである。かれらはおそらく意図的ではなかったにせよ、ことばの「このあいまいさにつけこんだ」のであって、かれらが樹立した見解は、「なるほど、ことばのうえでは人類のもっとも明白な諸判断と正反対のものではあるが、実際には、これらの判断と完全に一致している」のである (*Ibid.*).

以上の熱・冷にかんする議論が、そのまま味覚、嗅覚および聴覚について用いられることになる (*E. W.*, pp. 193—95). つまり、これらの諸感覚の対象である、味、におい、および音も、熱・冷とまったく同種類の感受作用 **sensations** であって、いずれもそれぞれの感覚器官の内部において感じられるものであり、それ自体では、いかなる外的対象の存在をも暗示するものではなく、ただ経験によって、これらの感受作用とそれらの原因である外部の諸物体とが関係づけられるにすぎないのである。したがってここでも、ことばのあいまいさがつきまとうことになる。しかしながら、たとえば、「この食物はよい味がする」**the food we eat has an agreeable taste** とか、「花がにおう」**the smell is in the flower** とか、また「ベルの音がする」**sound is in the bell** という表現において、われわれはけっして、食物や花やベル自体が、味やにおいや音を感じていると考えているのではなく、それらがいずれも、このような感受作用をわれわれの諸器官内にひきおこす力をもっているということを意味しているのであって、いずれのばあいにおいても、それらのことばのあいまいさが「人類の自然的な諸判断」を誤らせたり「思考の混乱」をひきおこすことはなく、「ことばの異なった意味が適正に区別されるときには、大衆 **vulgar** の意見と哲学者たちの意見とは、たとえ正反対のように思われようとも、まさに同一であることがわかる」のである (*E. W.*, p. 195). スミスは、以上の熱・冷、

- 
- 1) スミスは、内的感受作用と、その原因である外的な諸対象に内在する力、の両者が同一のことばによってあいまいに表示されていることのなかに、むしろ積極的な意味(自然の意図)を見出していたように思われる。このことは、視覚の分析を終えたあとの「本能」への言及によって明らかとなるであろう。

アダム・スミスの「外部感覚論」について

味, におい, および音を, 触覚の対象である固性と明確に区別して, 次のように総括する. 「哲学者たちのいわゆるこれらの四種類の第二性質, あるいはより適切に言えば, これらの四種類の感受作用, すなわち, 熱・冷, 味, におい, および音は, 器官に抵抗したり圧迫するものとしてではなく, 器官のなかにあるものとして感じられるのであるから, 外部の独立した実体として, あるいはそのような実体の諸性質としてさえ知覚されずに, 器官のたんなる感受作用 **affections** として, また器官のなか以外には存在しえないものとして知覚されることは当然である. それらは, 外部の独立した固性的実体に不可欠で, それから分離しえないとみなされる諸性質 [延長, 形状, 可動性, 分割性] のどれをももたないし, またそれをもちえると考えることもできないのである」(E. W., p. 195).<sup>1)</sup>

ところで, 感受作用とその原因となる外部の固性的実体(刺激物体)との関係について, 一般に哲学者たちは, 後者が直接に前者をひきおこすのではなくて, 二, 三の仲介的原因 **intermediate causes** が介在することによってもたらされると想定した. たとえばかれらは, 味覚のばあいには, 刺激物体から発せられるある種の液体が上あごの気孔のなかに入り, その器官の敏感な繊維のなかである種の振動をひきおこし, これがその器官内で味の感受作用を生み出すと考えたのである. また嗅覚のばあいには, 発嗅体から発せられる臭気 **Effluvia** と呼ばれる微粒子が, 呼吸によって鼻孔に吸いこまれ, そこでおいの感受作用を生ぜしめ, さらにまた, 聴覚のばあいには, 鳴り響く物体の振動がそのまわりの空気に, それに対応した波動をひきおこし, これが耳に伝達

1) しかしながらスミスは, 味, におい, 音については, 分割することは不可能であるけれども, ある種の合成と分解 **composition and decomposition** は可能であるように思われると述べ, 熟達した料理人, 調香師, 音楽家の例をあげている. そして, 単純感受作用 **simple Sensation** と複合感受作用 **compounded Sensation** とを識別するようになるのは, まったく経験によるものであるとしている (E. W., p. 196).

アダム・スミスの「外部感覚論」について

されることによって、そこで音の感受作用を生み出すと想定された。<sup>1)</sup> これらの諸学説について、スミスは次のようなコメントを加えている。「感受作用というものは、いかなる運動とも少しも類似性をもたないだけでなく、そもそもあらゆる運動が不可能に思われる」のであるから、「それらの仲介的諸原因が、われわれの諸器官にひきおこすと想定されうるさまざまな運動と振動によって、どのようにしてそれらのさまざまな感受作用を諸器官内に生み出すか」については、「哲学者はだれ一人として、いまだかつて説明しようと試みたことがなかったし、こんどもけっして試みないであろう」(E. W., p. 198—200)。スミスは、**Sensations** と **Solidity** の異質性をこのように再確認することによって、残された課題である視覚の分析に入ってゆくのである。

## II 可視的世界と触覚的世界との対応関係 —— 経験と本能 ——

視覚について述べるにあたって、スミスはまず、自分の議論がほとんどバークリーのそれに負うものであることを次のように言明している。「バークリー博士は……哲学的分析のもっともすばらしい実例の一つである、彼の『視覚新論』[**An Essay toward a New Theory of Vision** [1709]]において、視覚の諸対象の性質、つまりそれらと触覚の諸対象との対応関係のみならず、両者

- 1) これらの仲介的諸原因は、スケールはずっと小さいけれども、「天文学史」にみられる「自然の連結原理」である「見えない鎖」に相当するものであろう。スミスによれば、これらの仲介的原因についての「哲学的諸学説」のなかでもっとも蓋然性の高い基盤にもとづいているのは、音にかんする空気の波動や振動による説明である。しかもこの蓋然性は、真空の容器のなかでベルを鳴らすという実験だけによっても高められるばかりでなく、「音速は……空気と同一の比重をもつ流体の波動と振動が自然的に伝達される速度と完全に一致する」ことを証明したニュートンの計算によってさらにいっそう強められるのである (E. W., p. 199)。これに対して、太陽光線が、われわれの身体とわれわれの周囲の物体に、それぞれ熱の感受作用とそれをひきおこす力とを伝達するという、熱・冷についての説明 (E. W., p. 198) は、「存在しなければ作用しえない」**nothing can act where it is not** という（「われわれの自然的で通常の思考習慣」と少なくとも合致した）古来の形而上学における格言 (*Ibid.*) に由来する要求を表面的に満たしたにすぎないものであろう。

アダム・スミスの「外部感覚論」について

の相違点をひじょうに明確に説明したので、かれがすでに行なったことに私が付け加えるべきようなものはほとんどない。私がかくも偉大な教師にならって、同一の主題をあえて論じようとしたのは、私がこの機会にこれから述べようとする若干のことがらを、かれの書物を研究する機会がなかったかもしれないような読者に、理解してもらいたいためだけである。私がそれについて述べようとすることがらは、直接にかれから借用したものではないにしても、いずれも少なくともかれがすでに述べたことから示唆されたものである」(E. W., p.200)<sup>1)</sup>。ところで視覚理論にかんして、スミスがバークリーから学んだもっとも重要な点は、おそらく次のことであろう。すなわち、可視的対象と触覚的対象とは、ほんらいなんらの類似性ももたないにもかかわらず、自然の慈悲深い目的によって、視覚の対象は、いわば自然がわれわれの目に語りかける一種の言語となっており、これによってわれわれは、日常生活にとって必要な、外的世界についての情報を獲得するのだという見解である。スミスは、この視覚と触覚とのあいだにみられる対応関係を、さらに「本能」の次元にまで遡り、この「本源的原理」を、他の諸感覚の対象(熱・冷、におい、音)と触覚のそれ(外的世界)とのあいだにも見出そうとしたのであった。まず視覚についてのスミスの議論を追ってみよう。

触覚の対象が固性であるのに対して、視覚の対象は網膜に写し出された色彩にすぎない。われわれは通常、諸対象が遠くに見えると考え、したがって、それらの外在性が直接にわれわれの視覚によって知覚されると想像しがちであるが、「目から対象への距離が目に向けられた直線であって、この直線は目には一つの点としか見えないことを考慮に入れれば、目からの距離は視覚の直接の

1) フォーリーは初期スミス(オックスフォード留学時代)の思想に対するバークリーの影響を指摘している。V. Foley, *op. cit.* pp. 88-91. かれの根拠は、1744年7月2日付けの母宛のスミスの手紙 [Letter 6, *The Correspondence of Adam Smith*, ed. by E. C. Mossner and I. S. Ross, 1977, p. 3] のなかにみられるタール水の効能への言及である。Cf. G. Berkeley, *Philosophical Reflections and Inquiries Concerning the Virtue of Tar-Warter*, pub. in April, 1744.

## アダム・スミスの「外部感覚論」について

対象ではありえず、すべての可視的对象は、当然に器官に密着したのものとして、あるいはより適切に言えば、おそらくすべての他の感受作用と同様に、それらを知覚する器官のなかにあるものとして知覚されるにちがいないことに気づくであろう」(E. W., p. 200). バークリーが正当にも述べたように、視覚の対象と触覚の対象とは二つの世界を構成し、両者はもっとも重要な対応関係 **corresponence and connection** をもっているが、どんな種類の類似性 **resemblance** ももたないのである。後者が立体の世界であるのに対して、前者は平面の世界であって、(絵画のばあいと同様に) ある種の陰影と色彩の組合せによって、立体の世界を暗示し表示しうるにすぎないのである (E. W., p. 203). 触覚的諸対象は、それらを観察するわれわれの位置にかかわらず、つねに同じ大きさと比例を保っているのに対して、それらのたんなる投影 **shadow** にすぎない可視的諸対象は、目の位置によってたえず変化する。スミスによれば、触覚的諸対象にそなわっている大きさ、比例、同一性などを、われわれが想像力によって可視的諸対象に帰属させがちなのは、われわれの全注意が、可視的・代表的諸対象 **visible and representing objects** にではなくて、触覚的・被代表的諸対象 **tangible and represented objects** に向けられているからなのである。可視的对象そのものは、われわれに有益であったり危害を加えたりするものではない (E. W., pp. 205—206). 遅かれ早かれわれわれの身体に影響を及ぼすのは触覚的对象なのである。したがってこのことから、われわれに視覚を賦与したさいの「自然の慈悲深い目的」が、「われわれをとり囲む触覚的諸対象の位置と距離にかんして、われわれに情報を与えること」であることが明らかとなる。というのは、「この距離と位置についての知識に……人間生活の全行為が依存している」のであり、「それがなくては、われわれは完全な安全性を伴って動くことも静座することもできない」からである (E. W., p. 209).

スミスはバークリーの指摘にならって、視覚の対象は「自然の創造者がわれわれの目に語りかける一種の言語」に相当し、これによって自然の創造者はわれわれに多くの重要な情報を提供しているのだと考える。なるほど、通常の言

アダム・スミスの「外部感覚論」について

語において、ことば（つまり音声）が、その意味する事物といかなる類似性ももたないように、この自然の言語においても、可視的対象は、その代表する触覚的対象とどのような類似性ももたない。しかし自然の言語においては、「たとえば、可視的方形は可視的円形よりも、触覚的方形を代表するのにうまく適合している」ように、特定の可視的対象と触覚的対象とのあいだには、一定の類縁性もしくは対応関係 **affinity or correspondence** が存在するのである (*E. W.*, pp. 209—210)。視覚の言語の習得にあたって、外国語の習得のばあいにくらべてはるかに短期間に急速な進歩がみられるのは、自然の言語におけるこの「代表の適合性」 **fitness of representation** によるものである (*E. W.*, p. 214)。しかしながらスミスは、「可視的対象と触覚的対象とのあいだの類縁性と対応関係だけでは、また観察と経験の手助けがなくては、どのような理性の努力によっても、おのおのの可視的対象が代表する正確な触覚的対象が何であるかを、われわれに推測するように教えることはできないであろう」と述べ、白内障手術を受けた青年が、観察と経験によって視覚の言語を習得してゆく過程を、<sup>1)</sup>チェゼルデン氏の記述を引用しながら例証していくのである (*E. W.*, pp. 211—14)。

ところが、そのあとスミスは、このような青年が可視的対象と触覚的対象との対応関係についての知識を獲得するにいたったのは、もっぱら「観察と経験の緩慢な歩調」によるものであったにしても、このことから幼児が両対象間の関係についての「本能的な知覚」 **instinctive perception** をもっていないとは確信しえないと主張し (*E. W.*, p. 215)、以後、経験に先行する本能の問題を考察の中心にすえるのである。かれは次のようにいう。大部分の動物の子どもは、経験に先立って、この種の本能的な知覚を与えられているのであ

1) Cheselden の白内障手術 (1728年) の報告は、当事の視覚理論にかなり利用されたらしく、T. リードもその「五感論」のなかでこれに数度言及している。Cf. Thomas Reid, *An Inquiry into the Human Mind, on the Principles of Common Sense*, 1764. スミスの「外部感覚論」については、スコットランド・コモンセンス学派の代表者であるリードの感覚論との比較検討が今後の課題の一つとなるであろう。

アダム・スミスの「外部感覚論」について

<sup>1)</sup>て、「人間が、その子どもにこの種の本能的知覚が賦与されていない唯一の動物であると想定することは困難に思われる。」なるほど、人間の子どものには、この本能は他の動物にくらべて必要性がずっと少ないように思われ、「それがかれらの役に立ちうる以前に、観察と経験が、観念連合という既知の原理 **the known principle of the association of ideas** によって、かれらの幼い心のなかで、おのおのの可視的対象とそれが代表するにふさわしい対応的な触覚的対象とを十分に結合したかもしれない。」しかしながら「子どもはひじょうに早い時期において、かれらに差し出されるさまざまな触覚的対象の距離、形、および大きさを知るようにみえるので、私はかれらでさえも……この種のなんらかの本能的知覚をもっていると信じたい気になる」<sup>2)</sup>(*E. W.*, p. 217).

スミスは、事物の外在性の直接的な認識は触覚だけによって可能であって、他の感覚は、経験（観念連合）によってのみ外部の独立した実体を暗示するにすぎないということを強調していたが、ここにおいて、「観察と経験に先立って」視覚は、「抵抗する固性的実体についてのある概念をわれわれに本能的に暗示する」と主張するにいたった (*E. W.*, p. 218). つまり **Sensations** と外部世界との結合関係は、経験による観念連合だけに求められるのではなく、もっと本源的な原理のなかに見出しうると考えるのである。そしてすでに考察した他の諸感覚についても、それらが外的実体についての本能的な知覚をもっていないかどうかの再吟味に移ってゆくのである。

まず味覚については、その感受作用である味を感じるよりも前に、それをひ

- 
- 1) スミスは鳥類と四足獣の例をあげ、それらがすべて経験に先立って「視覚の言語」を完全に理解していることを例証している (*E. W.*, pp. 215—17).
  - 2) かれは次のような例をあげている。「生後二、三カ月未満の子どもの前に小さな鏡を差し出してみよ。そうすればかれはその小さな手を鏡のうしろに差しのべて、自分の見ている子ども……にさわろうとするであろう。かれが欺かれることは確かである。しかし、この種の欺きでさえ、かれが視覚の通常の遠近関係 **ordinary perspective of Vision** をかなり明確に理解していることを十分に証明しているのであって、かれはおそらくそれを観察と経験からは学びえなかったであろう」(*E. W.*, p. 218).

アダム・スミスの「外部感覚論」について

きおこす外部の固性的実体が、味覚器官に圧迫を加え、それゆえその器官によって知覚されねばならないので、観察と経験に先立っては、外部的実体の概念を暗示しえない (*E. W.*, p.218). これに対して嗅覚のばあいには事情が異なる。「においては特定の食物に対する食欲 **appetite** をかきたてるか、あるいは少なくとも、生まれたばかりの動物をその食物が見出される場所にまで導くように思われる」 (*Ibid.*). ところでスミスによれば、身体の一定の状態に起源をもつすべての欲求 **appetite** は、それ自体を満足させる手段と、その満足に伴う快樂の予感もしくは先入感 **anticipation or preconception** を暗示すると考えられるのであって、哺乳類の子どもにとってその欲求を満たす手段は乳を吸う動作であり、また快樂の予感によってかれらはたえずその口を、それによってのみその快樂を味わうことができるような形にするのである。においては、外部的実体の形や大きさとはいかなる類縁性や対応関係ももたないのであるから、哺乳類の子どもがこれらについていただく先入観は、においやそれによってかきたてられる食欲によってというよりも、むしろその子供に乳を吸うようなしぐさにしむける原理によって暗示されるということができよう。しかし、においては、食欲をかきたてるばかりでなく、食欲を満足させる対象に近づく方向をも暗示するのであるから、方向の概念に必然的に含まれている距離と外在性を暗示し、したがって、少なくともその物体の存在についての観念を暗示するにちがいないのである (*E. W.*, pp. 219—220).

熱さと冷たさについては、まず、直接に物体に触れる（つまり圧迫する）ときに感じる感受作用のばあいには、観察と経験に先立って、外部の固性的実体の概念を本能的に暗示しえないことは、味覚のばあいと同様である。われわれがこれらの感受作用を感じる前に、「それらをひきおこす外部の物体の圧迫が、それ自体の外部的で独立した存在についての、なんらかの概念だけでなく、もっとも明確な確信を必然的に暗示するにちがいないのである」 (*E. W.*, pp. 221—22). これに対して、外気 **external air** の温度によってひきおこされる感受作用のばあいには事情が異なる。生まれたばかりの、しかも自分で動く能力のある動



## アダム・スミスの「外部感覚論」について

物は、身体の両側に異なった温度を感じる時には、本能的に、あらゆる経験に先立って、快適な温度の方向へ移動し、不快な温度の方向から遠ざかろうとするであろう。この運動への欲望そのものが外在性の概念もしくは先入観を想定しており、快適な感受作用の方向へ移動しようとする欲望が、その感受作用の原因である外部の事物もしくは場所の概念を想定しているのである。快適な熱さ・冷たさは、健全なもの、つまり身体にとって有益なものであり、不快なそれらは、不健全なもの、つまり有害なものであり、苦痛を伴うほどのものであれば破壊的なものとなるであろう。したがって、熱・冷の感受作用は「われわれの身体の保全のために与えられたように思われる」のであって、もしそれらが物体の外的存在についてのあるべく然とした概念を本能的に暗示しなかったならば「自然の意図」によく応じられなかったであろう (E. W., pp. 221—23).

聴覚の対象である音のばあいについては、スミスは、視覚や嗅覚や熱・冷などにおけるような適例を思い出すことができないとしながらも、それが、それをひきおこす外部的実体についての概念を「本能的にしかもあらゆる観察と経験に先立って」暗示することはずっと明らかであるように思えると主張する。たとえば、異常で予期しない音を聞くと、われわれは必ず驚き、その原因としての外部の物体をさがし求める気になるであろう。たんなる感受作用 *affection* にすぎない音は、それ自体としては、われわれに危害を加えたり、有益な効果をおよぼすわけではない。「それは快適であったり不快であったりするかもしれないが、それ自体の性質においては、直接的な感じ *immediate feeling* 以上のなにものをも告げない」のであり、したがってどのような驚き、警戒 *alarm* をひきおこすものではない。「警戒は、つねに直接に感じられることがら以上のなにか不確定な 害悪への恐れであり、ある未知で外的な原因に由来する」のである。しかしながら、すべての動物、とりわけ人間は、ある程度この種の警戒心をいだき、異常で予期しない音には用心深くなるのである。スミスによれば、「この効果は……容易にかつ即座に生み出されるので、それは自然の手 *hand of Nature* によって直接に刻印された印象を本能的に暗示するとい

アダム・スミスの「外部感覚論」について

うあらゆる徴候をもっており」, しかもこの暗示は, 過去の観察や経験のいかなる記憶にたよることもないのである(*E. W.*, p. 223). 以上のように, 「感受作用」と「外部に独立した抵抗する固性的諸実体」との関係を再吟味したあと, スミスは当該論文を次のことばによって終えている. 「視覚, 聴覚, および嗅覚の三つの感覚は, われわれの身体の現実の位置にかんしてというよりも, われわれから若干離れていても, 遅かれ早かれその現実の位置に影響をおよぼし, 結局はわれわれに有益となるか有害となる他の外部的諸物体の現実の位置にかんして情報を提供するために, 自然によってわれわれに与えられたように思われるのである.」(*Ibid.*)

### Ⅲ 自然のエコノミー

『道徳感情論』のなかでスミスは, 自然界においては, 諸手段がそれによって生み出すことが意図されている諸目的にみごとに適合されており, すべてのものが自然の二大目的である「個体の維持と種の増殖」を促進するよう工夫されていることを指摘し,<sup>1)</sup> この自然の秩序<sup>エコノミー</sup>についてさらに次のように説明している. 「その特別な重要性のために, もしこういう表現が許されるならば, 自然の愛好する目的とみなしていいような, あらゆる目的については, 自然はつねに……自分が意図する目的への欲求 **appetite for the end** を人類に与えておいただけでなく, 同様に, この目的がもたらされうるにはほかにない諸手段を, この目的を生み出すというそれらの傾向と関係なく, それ自体のために求める, 欲求 **appetite for the means** を与えておいた.<sup>2)</sup>」したがって, 自然の二大目的である「自己保存と種の増殖」<sup>3)</sup>については, 人類はそれらの目的についての欲望 **desire** とその反対物への嫌悪(すなわち「生命への愛と死滅への恐怖, 種の継続と永続性への欲望, そしてそれを完全に消滅させようという考えへの嫌悪」)を与えら

1) *T. M. S.*, p. 87, 邦訳 136 ページ.

2) *T. M. S.*, p. 77, 邦訳 120 ページ.

3) *Ibid.*

## アダム・スミスの「外部感覚論」について

れているけれども、それらの目的をもたらしするための適切な手段の発見は、「われわれの理性の、遅くて不確実な決定」にではなくて、「本源的で直接的な諸本能」<sup>1)</sup> **original and immediate instincts** にゆだねられているのである。ところで、「飢え、渇き、両性を一体とする情念、快樂への愛、苦痛への恐怖」などがこれらの目的を達成するための手段であるが、<sup>2)</sup> 「外部感覚論」においては、さらに、「身体の特定の状態に起源をもつすべての **appetites**」は、みずからを満足させるための手段と、その満足に伴う快樂の予感を暗示するものであると明言されていた (*E. W.*, p. 219). たとえば、食物のにおいによって **appetite** をかきたてられた新生児は（その欲求を満たす唯一の手段である）乳を吸うしぐさを行なうであろう。このことからスミスは、**Sensations** と **Solidity** とは、ほんらいなんらの類似性ももたないにもかかわらず、自然の意図によって密接に結びつけられていると考えたのである。この結びつきは、「既知の原理である観念連合」にもとづく）経験によってしだいに緊密なものとなってゆくのであるが、スミスによれば、両者の結合は根底において「本源的で直接的な本能」によって支えられているのである。

「人間本性の体系は、そのすべてのちがったはたらきが……単一の原理からひきだされるならば、いっそう簡単で快適なものであるように思われる」であろうが、<sup>3)</sup> そのような「とくに哲学者たちが特別の愛好をもって涵養しがちな性向」<sup>4)</sup> は、「ほんとうは神の知恵であるものを、人間の知恵であると想像する傾向がひじょうに強い」のである。<sup>5)</sup> 『哲学論文集』冒頭の論文である「哲学研究指導原理」においては、ヒュームの影響が著しいことは明らかである。そこにみられる哲学諸体系は、すべて想像力の産物として、あるいは「慣習的結合」にも

1) *T. M. S.*, pp. 77—78, 邦訳 120 ページ.

2) *T. M. S.*, pp. 78, 邦訳 120 ページ.

3) *T. M. S.*, p. 87, 邦訳 137 ページ.

4) *T. M. S.*, p. 299, 邦訳 372 ページ.

5) *T. M. S.*, p. 87, 邦訳 136—37 ページ.

アダム・スミスの「外部感覚論」について

とづく想像力の自然的な流れを回復させる試みとしてとらえられていた。ラフィエルの表現をかりれば、スミスの「天文学史」は、ヒュームの『人間本性論』における外的世界についての認識論「諸感覚についての懐疑論について」(BK. I, Pt. IV, ch. ii) の議論を「科学史」に適用したものであった。<sup>1)</sup> しかしながら、スミスが「外部感覚論」の後半において「観察と経験に先立つ本能的知覚」という異質な要素を導入するにいたったのは、外的世界の認識に関しては、ヒュームの原理だけによっては十分に説明しつくされないと感じていたからであった。同様に、スミスが、**Sensations** に与えられることばのあいまいさを指摘しつつ、他方で、それによって「人類の自然的な判断」が欺かれるものではありえないことを強調したのも、これらの感受作用と外的世界とが、「経験の頻度と斉一性」よりもずっと本源的な原理によってかたく結ばれていると理解していたからであった。この意味において、「外部感覚論」における「本能的知覚」への言及は、『道徳感情論』における「直接的感觉と気分」**immediate sense and feeling** の強調と呼応するものといえるであろう。<sup>2)</sup><sup>3)</sup>

- 
- 1) D. D. Raphael, "The true old Humean philosophy" and its Influence on Adam Smith', in *David Hume, Bicentenary Papers*, ed. by G. P. Morice, 1977, p. 28.
  - 2) 「哲学の諸論証は、悟性を混乱させ当惑させるものではあっても、けっして、自然が諸原因とそれらの諸結果とのあいだに確立しておいた必然的な結合を、断絶させるものではありえない。」*T. M. S.*, p. 293, 邦訳 364 ページ。
  - 3) たとえば、(いわば内部感覚ともいえる)「適宜性の感覚」**sense of propriety**, 「値うちと欠陥についての感覚」**sense of merit and demerit**, 「正義の感覚」**sense of justice** などの基本的性格を想起せよ。なお、スミスによれば、**moral sentiments** の理論構築にあたっては、これまでにかけて聞いたことがない **moral sense** のような新しい知覚力を想定する必要はないのであって、「自然は、ここでも、他のすべてのばあいのように、もっとも厳密な経済性をもって行為するし、同一の原因から多数の効果をうみだす」のであるから、「いつも気づかれる力であり、あきらかに精神がそなえている力である、同感が、この特殊な能力に帰せられるすべての効果を、十分に説明する」のである。*T. M. S.*, p. 321, 邦訳 407—408 ページ。